

# まばらのひめさし 魔孕の姫騎士

屈辱の受胎

立ち読み版

小説 天戸祐輝

挿絵 こうきくう



第一章	ファークエレトの女神と聖女	006
第二章	女神の悲しみ	027
第三章	聖女に降りかかる現実	065
第四章	魔物たちの狂宴	097
第五章	侵食される王女	143
第六章	抗えない運命	181
第七章	女神と聖女の屈辱	229

## 登場人物紹介

Characters



### アイリネイチェ・ ファークエルト(アイネ)

ファークエルト王国の第一王女。魔力はさほどでもないが、戦闘時は兵の先頭に立つこともあるほど剣の腕は抜群。鍛錬のせいか、引き締まったボディラインを持つ。



### リティーフォンゼ・ ファークエルト (リーティ)

アイリネイチェの妹。強大な魔力を有しており、伝説に伝わる魔王を産む存在かもしれないと危惧されている。おっとりした性格ながらも、豊満なバストの持ち主。

### シュローイル

伯爵の位にあり、幼い頃のアイネに剣技を教えたこともある。

### ルマウイル

人望も篤く、城に出入りを許されている司教。

### エスグト

隣国の王子で、アイネの婚約者。

### アブシルン

聖騎士団の兵士で、リーティが想いを寄せる相手。

### 第三章 聖女に降りかかる現実

あまりの怒りに、言葉すら出てこない。

こんな人物を幼い頃から尊敬し、偽りの優しさを今まで信じていたなど、自分自身すらも嫌ってしまいたいそうさ。

「僕の正体が分かったのなら、その手を下げていただけませんか。そうでないと、あの男の命は」

「……卑怯者……」

丁寧な言葉のまま脅迫してくるルマウィルに従うのは屈辱だが、想い人を人質にされた状態では仕方がない。

リーティは唇を噛み締め、ゆつくりと掲げていた右手を下ろした。

「素直な娘は好かれませんが、王女」

「戯言はもうおやめなさい。用件は何ですの？」

気に障る口調に、感情を抑えた声で答える。

「話が早くて助かりますな。僕の目的は王女、お主の身体に決まっておるじゃろうが。その肢体を差し出し、僕の妻になって仔を孕んでもらいますぞ」

「わたくしは魔物に嫁ぐつもりなんてありませんわっ！」

「ぐうがああああああっ！」

老司教の要求に激昂で答えた瞬間。アプシルンの肩にコウモリ貌の魔人が噛み付き、肉を喰い千切ろうと牙をめり込ませていく。

「おやめなさいっ！」

「なら、この場で誓ってくださいませんか。僕にその身を捧げると」

「っ……」

アプシルンの苦痛に歪む貌を見るのは、もう彼女には耐えられない。それに、たとえこの魔物司教に犯されたとしても、魔氣と反発する自分の強大な魔力で受胎は防げるはず。覚悟を決めた王女が、その悲しくも屈辱的な言葉を口にした瞬間。

「だ、大丈夫ですりティーフォンゼ様……私のことなど気にせず、お逃げ……」

「三下は黙っておれ」

「ぐが——っ！」

王女との会話を邪魔されたルマウイルが魔人に命じ、さらに牙を肉に喰い込ませた。

「や、やめてくださいっ！ 捧げますわ、わたくしの身をルマウイル司教に捧げますから、もう彼を苦しめないでっ！」

無意識に出てしまった言葉だった。しかし、その言葉を聞いたルマウイルは皺の刻まれた貌にニヤリと笑みを浮かべ、舐めるような視線で魔道姫の身体を見つめてくる。

「ひゃひゃひゃ。最初から素直になっておれば、あの男も苦しまずに済んだでしょうに。アプシルンの傷を増やしたのは王女ですぞ」

「……っ！」

姉よりも大きな峰乳に女らしく括れた細腰。そして、ドレスローブのスカートの後部を

持ち上げているお尻を見られるだけで、悔しさが込み上げてくる。

人質を取られたとはいえ、こんな魔物に肉体を穢されると思うだけで、今にも吐いてしまいたい。

「さあ、楽しませていただきますぞ、リティーフオンゼ様。ひゃひゃ」

「っ……。お好きに……」

これから行われる恥辱には屈しないとばかりに、凜とした姿で立つて瞳を閉じる。

「ファークエルトの聖女が僕に身を捧げるとは。ひゃひゃ、まず初めに、そのいやらしく育った胸を見せていただきますかな」

「見せてっ……きゃっ!!」

ビリッ！　ビリビリビリッ！

思わず、可愛らしい悲鳴を上げてしまう。

老司教の両手がドレスローブの胸元に触れ、巨峰乳を直接見ようと破いてきたのだ。

ドレスローブの胸元は、まるで男を誘う娼婦ドレスのように裂け目を作られ、白い乳肌と淡いピンクのハーフカップポルセットが、夜の冷たい空気に撫でられてしまった。

(わたくしの胸が魔物に……)

アプシルンだけではなく、幾多の魔物にまで下着に包まれた巨峰乳を見られた悲しみが、覚悟を決めたリィティの心に広がっていく。

「ひゃひゃひゃ。想像していたよりも遥かに美しい胸ですぞ。これが僕のものになるとは、

「恐悦至極でございます」

（この方はっ!）

下着に包まれた胸を舐めるように見る老司教に、苛立ちが込み上げてくる。先ほどからの笑い声も気に障り、触手で腕を拘束されていなければ彼の貌を叩いてしまいたいそうだ。

「僕は女を喜ばすのが得意でな、自分の教会に居るシスターどもを、全てチンポ好きの娼婦に仕立てて毎晩相手をさせておる。王女もすぐに感じさせて、肉交の快楽をその美しい肢体の芯まで刻み込んで差し上げますぞ」

「下劣ですわ……」

胸元に手を伸ばしてくる老司教の言葉と姿に虫唾が走る。

「おっと、リーティの胸に興奮して忘れるところだった」

すでに自分のもののように魔道姫を呼び捨てにしたルマウイルが、司教服の胸元からガラス小瓶を取り出してきた。その小瓶の中には半透明なジェル状の液体が詰められ、彼が傾ける度にゆっくりと流動している。

「それは？」

「さすがに知りませんか。まあ、説明せんでも、すぐに分かりますぞ」

魔道姫の質問をごまかしたルマウイルは、ポンツという軽い音を鳴らして小瓶のコルクを抜き、半透明なジェル液を彼女の胸に垂らしてきた。

「冷たっ!? んう……」

得体の知れない液体を身体に垂らされた気持ち悪さと、氷水のような液温に背筋が震え、一瞬にして全身の肌にも鳥肌が立ってしまった。

肌に触れたジェル液はすぐに滑らかな液体に変わって全身へと広がり、コルセットやショーツの中に流れ込んで、王女の大事な部分まで濡らしてくる。

「さて、準備も整ったところで、楽しませていただきますぞ」

「汚い手でさわら……っ!!」

いきなりルマウイルにコルセットカップをずらされ、大きな肉果実を夜空の下に剥き出されてしまった。

悲鳴を上げるヒマもない。想い人の前で晒されてしまった両胸は、重力を感じさせない張りぐあいで釣鐘型の肉果実を揺らしてしまう。透き通るような白い乳肌は先ほどの液体で艶めかしく濡れ、淡い色の小さな乳輪や薄ピンクの頂まで月明かりを反射させている。

「これはこれは。なんていやらしくて大きな胸だ。こんな恥知らずな胸は初めて見ますぞ」

「そんな言葉を……んっ!!」

胸を侮辱された言葉と同時に、老司教の手が大きな峰乳に触れてきた。

初めて異性にさわられてしまった胸には気持ちの悪い汚濁感が趨り、二つの肉果実を揉みながら沈んでくる彼の手が、先ほどの液体をたんねんに乳肌に塗り込んでくる。

「んう……う……嫌ですわ……」

想い人の前で巨峰乳を淫らな形に歪められる屈辱に、自然と唇から拒む声が洩れ、幼さ

の残る美貌が羞恥に染まっていく。

自分が他の男に嬲られる姿をアブシルンに見せないように、柔房を動かして少しでも老司教の手を遠ざけてみるが、彼の手はまったく離れず、年老いた指が瑞々しい乳肌の上を滑ってくる。

(なぜ、なぜこんな魔物に……。初めてなのに、アブシルンの前で……)

好きな男の前で、魔物に胸をさわられている屈辱が心を蝕んできた。

淫らな形に揉み歪まされる巨峰乳からは気持ち悪さしか感じず、ルマウイルの指が触れた部分から、少しずつ胸が腐食しているような錯覚さえ感じる。

「ひゃひゃひゃ。思っていたよりも柔らかい胸じゃっ！」

しかし、求めていた肢体を自由にできる老司教には、そんな状況でさえも興奮を高めるスパイスでしかない。眼の前で淫らに形を変える大きな肉果実になり、鼻息を荒くして柔肌に指を喰い込ませてきた。

「わ、わたくしを辱めて楽しんでなんて……。あなたは最低の……。はふっ！」

恥辱を感じつつも彼を侮蔑しようとした瞬間。突然二つの肉果実にくすぐったい刺激が趨り、唇から艶めかしい吐息が洩れてしまった。

(なっ、何ですの今の声はっ!? こんな声、出したくなど……)

「んっ……。ふぁ……。どうして……。っ、どうしてこんな声が……。んっっ!!」

何が起こったのか理解できない。突然、両胸全体が乳肌を張り、ムズムズと疼き始めて

しまったのだ。肉果実の内部には焦燥感を煽る塊が生まれ、乳芽が痒くなりながら尖っていく。

「だいぶ薬が効いてきたようじゃな。先ほどの液体は、魔物の体液から作り出した強力な媚薬じゃ。じきに全身が疼きだして、気持ちよさしか感じぬ身体になるわい、ちゅぽっ」

「そんな……ひゃふううっ！」

いきなり右の乳首にしゃぶり付かれ、生暖かいザラ舌を乳芽に絡ませられた感覚に、リーティは顎を仰け反らせて嬌声をあげてしまった。

ナメクジを思わせる舌を乳芽に這わされ、ネットリとした唾液をまぶされるだけで、敏感な頂が筆で撫で回されているように痒くなっていく。

「どうしてこんなに……んううっ！」

頭が混乱していく。ルマウィルが乳芽をゾロリと舐めてくるだけで、尖った頂から強烈なくすぐったさが全身へ広がってくる。揉まれている肉果実は、心地いい圧迫感に包み込まれて肌を騒がせ、吸われていない乳首まで完全に尖り勃ってしまった。

「どうですかリーティ。胸を吸われるのは気持ちがいじょうよう？」

「んん……気持ちよくなんて……わたくしは何も感じてははいませ……」

カプッ！

「ひゃんんんんんんんっ!!」

吐息を繰り返して老司教の言葉を否定した途端。いきなり右の乳芽に歯が立てられた王



女は白喉を仰げ反らせ、堪えられない嬌声を張りあげてしまった。

甘く嘯み締められた頂からは、まるで鋭利な針を通してしまったような痛みと痺れが生まれ、大きな肉果実全体を強烈な痛快感で侵食してくる。

「んあああ……ああ……イヤですわこんなの……こんな……」

「そんなに嫌か？　でも王女の肉体は喜んでいるようですよ。ほれ」

「くううう——っ！」

もう一つの乳芽を彼が指の間に挟み、巨峰乳を揉みながら潰してきた。それだけで魔道姫の両胸は激しく痺れ、まだ責められてもいけない膣と子宮が収縮し始めてしまう。

シヨーツの中は蒸すような女熱で包み込まれ、秘孔からトロリと処女蜜が溢れ出してしまった。

「ひゃひゃひゃ。口ではなんと言おうと、娼婦のような身体をしますなりーティは。媚薬を使ったとはいえ、こんなに簡単に感じる女は初めてですぞっ！」

老司教の口から出てくる辱めの言葉が、彼女の心に深い傷を刻み込んでくる。

覚悟した陵辱だが、媚薬が使われて強制的に感じさせられるなど、女にとって最大の屈辱だ。しかも、媚薬が染み込んでしまった肉体は、彼の言葉に従うように全身を疼かせ、シヨーツの底に淫らな染みを広げていく。

「んう……きゃふつ！　はあはあ……」

肉果実を揉まれる圧迫悦と、乳首を吸い潰される痛痒さに、何度も唇から吐息が洩れて

いく。胸はもう強く揉まれていないと我慢できないほど疼き、乳芽は今にも弾けてしまいそうな焦燥感に包み込まれてしまった。

「姫様……」

「大丈夫……大丈夫ですわ……」

心配するアプシルンの言葉に、吐息混じりの声で応える。

しかし、どんなに与えられる愛撫に我慢しても、媚薬を塗られた肉体は如実に反応してしまい、想い人の目の前で感じてしまう。

「胸はもう十分感じているようすな。では、スカートを捲りなされ。僕のチンポをぶち込むオマンコが、まだ処女のままか調べて差し上げますのでな」

「なっ!?!」

散々廻りまくった肉果実から口と手を放した老司教が、いやらしい笑みとともに口にした恥辱的な要求に、リーティは言葉を失ってしまふ。

処女を調べるために自らスカートを捲るなど、王女として、一人の少女としても羞恥にすぎない行為だ。しかも、それを想い人の前でするなど、絶対にできない。

「そ、そんなことをしなくても、わたくしはこの身を男性に捧げたことなどありませんわっ!」

触手が巻きついた両腕で胸を庇い隠しながら、卑猥な要求を拒否する。

「そうですか。しかし、自分で確かめてみたいのでしてな。胸など隠してないで、早く

その手で捲つてくたされ。さもないとアプシルンは……」

「……卑怯者っ」

苦虫を嘔み潰したように美貌を歪めながらも、魔道姫は胸を隠していた両手を白いドレスローブへと移動させ、そつとスカートの裾を持ち上げる。

「うう……」

アプシルンの前で、自ら別の男に下着を晒さなければならぬ屈辱に、緑の瞳から涙が零れてしまいそうになる。

長いスカートの裾が、白いヒールを履いた足元から細い美脚へと捲れる度に、ルマウエルと魔人、そして想い人の視線が突き刺さり、彼女に屈辱的な羞恥を与えてきた。

「もつとじゃ、もつと早くスカートを捲れっ！」

（なぜ、わたくしが……）

興奮で命令口調になった老司教の言葉を聞きながら、自分が娼婦に身を墮としてしまったような気分になっていく。

自ら捲り上げるスカートの裾は、瑞々しい太腿まで彼らの眼に晒し、あと少し持ち上げればショーツが見られてしまうほどだ。

（今は耐えるしか、耐えるしかありませんわ……）

自分に視線を向けている聖騎士の姿を一瞬見た王女は、震える手でゆつくりと裾を持ち上げ、淡いピンクショーツのクロッチを晒した。

「ひゃひゃひゃっ！ リーティが下着を見せやがったぞ。ほれもつとだ、もつとスカートを捲り上げろっ」

興奮を抑えられなくなった老司教が、彼女の前で腰を屈め、さらに命令を下してくる。

「ケダモノ……」

あまりの羞恥に、ポツリと声を洩らしながらも、王女はスカート裾を大きなリボンで彩られた腰まで持ち上げ、清楚なショーツの全てを、いやらしい笑みを浮かべるルマウイに披露した。

「なかなかいやらしい下着を着けておるではないか。ショーツ越しにオマンコの形まで分かって……ん？ これは少し濡れているではないかっ!？」

触れてしまうほど淡いピンクショーツに貌を近づけた老司教が、ふっくらとした女肉を包むシルク布を凝視して、わざとらしく驚いている。

媚薬を使われた所為で、異常なほど発情させられたリーティの身体は、自然な反応で膣を潤し、縦の皺があるショーツの底を濡らしていたのだ。しかも、両胸に続いてショーツまで見せてしまった羞恥に、その染みが少しずつ広がっていく。

「なんて淫乱な王女だ。これは疑わしい、本当に処女か今すぐに調べてやろうっ！」  
「やめっ!? そんなところに貌を……」

慌てて彼の行為を止めようとしたが遅かった。

普段は見られない王女の下着に興奮した老司教が、いきなり大きなお尻を前から鷲掴み、

彼女が動けないように固定して太腿の間に貌を割り込ませてくる。

「おやめなさいっ！　そこは……」

「黙ってスカートを捲つておれ。今すぐに胸よりも感じさせてやる……レロ」

初めてお尻をさわられたくすぐったさも、太腿の間に貌を挟み込まれた羞恥も感じている間がない。彼が内腿の柔らかかな感触を楽しみながら舌を触手のように伸ばし、濡れたシヨーツのクロツチから侵入させてきたのだ。

唾液にまみれた魔舌は、王女の拒みを無視して淫部に這い回り、薄い草むらを掻き分けながら、舌先を縦の溝でしかない女裂に潜り込ませてくる。

「んはっ、やめて……やめてください……あうっ、そんなところを舐めないでっ！」

幼さの残る美貌を左右に振り、長い金色の艶髪を振り乱しながら拒む。

ナメクジのような舌が、徐々に誰にもさわらせたことのない秘孔に近づいてくる。しかし、不思議とおぞましさは感じない。全身に染み込んだ媚薬の所為で、ゾクゾクとした高揚感が心の中に芽生え、被虐的な興奮が肉体を蝕んでくる。

淫核は自然と肉芽を剥き出して淫部を舐めている舌腹に触れ、身悶えするような痺れで股間部を直撃してきた。

「うああ……嫌ですわこんな……こんなことはもう……っ!？」

淫唇を掻き分けた魔舌がとうとうサーモンピンクの秘粘膜に辿り着き、膣内に挿入するように秘孔を舐めてきた。

淫部からは堪えきれないムズ痒さが全身へと広がり、処女孔の縁を舌先で辿られる度に膣からは愛液が溢れ、彼女の両脚に淫らな蜜糸を伝わせていく。

「本当に淫らな王女だ。中の味はどうですか？」

「な、なかつて……」

「やめろルマウイルっ！ それ以上リティーフオンゼ姫を……」

ヂュポッ！ ジュズジュールヂュニユ……。

「はあううううううううう——っ！」

王女の姿をこれ以上見ていられない聖騎士が叫んだと同時に、処女孔に魔舌が侵入し、何枚もの膣襞を舐めながら奥へと進んできた。

軟体の舌が膣内に入り込み、愛液に濡れた膣襞を舐められた感触に、魔道姫は一瞬にして全身を痺れさせ、嬌声を上げながら肢体を強張らせてしまう。

「んあああ……ああ……はくっ、嫌ですわ……」

想い人に見られながら淫部に老司教の貌を埋められ、膣内に侵入した魔舌がウネウネと動いて処女膜まで舐めてきた感触に、王女は一滴の涙を頬に伝わってしまった。

愛液にまみれた太腿は羞恥と屈辱に震え、膣内を舐められる異常な行為に、今にも身体から力が抜けて倒れてしまいそうだ。

「ひゃひゃひゃっ。こんな淫乱が本当に処女だったとは思わなかったぞ」

ヂュポッ！

「はふううっ!!」

魔道姫の肉体を調べ終わったルマウイルが処女孔から舌を引き抜き、スカートを捲った姿勢のままにいるリーティの前に立つてきた。

「マンコを舐められたのが気持ちよかったようじゃな。なら、今度はこれをそのマンコに入れて差し上げますぞ」

「——っ!?!」

司教服を捲ったルマウイルの股間から現れた、二十センチほどの長さに勃起したペニスに、リーティは声を出せなくなってしまう。

老司教のペニスは直径三、四センチ程度で、一般的な成人男性よりも少し長いモノだった。しかし、初めてペニスを見てしまった魔道姫にとつては、魔物と同じくらい忌むべき対象にしか見えない。

離れていても鼻腔に染み付いてしまうような雄臭。ビクビクと脈を打つ浅黒い肉幹。他の部分より一回り膨らみ、矛先のようにエラを広げる龟头。そして、涎のようにカウパー液を垂らしている龟头。その全てが、生物の一部とは思えないほど醜い。

「貫きますぞリーティ。僕のチンポでイキまくらせて、たっぷりとそのマンコの奥に精液を注いで差し上げましょう」

「あ……ああ……」

初めてのペニスを前に怯えるリーティを、老司教がテラスの床に押し倒してきた。

「見ないで、もうこれ以上は見ないでください……アブシルン……」

老司教の手が淡いピンクショーツにかかり、片脚から引き抜かれていくのを感じながら、瞳に想い人の姿を映して最後の願いを伝える。

アブシルンの熱い視線が薄い金色の草むらを、包皮から剥き出た肉芽や、愛液にまみれた淫部までを貫いてくる。

その視線を浴びながら処女を別の男に奪われるのは、もう耐えられない。

「ひゃひゃ、見せてやればいいだろうに、僕らが愛し合う姿をっ」

片脚からショーツが引き抜かれ、細い両脚が老司教の手で広げられて、興奮にドス黒い赤眼を血走らせた彼が太腿の間に腰を割り込ませてきた。

筋を浮き上がらせた内腿に挟まってきた老司教の腰と体温を感じさせられ、薄く開いた淫部には灼熱の切っ先が押し付けられてくる。

「い、いやですわ……せめて彼の、アブシルンの居ないところで……」

処女を奪われる姿を想い人に見られたくない一心で、肢体の上のにのし掛かってきたルマウィルに懇願した。

しかし、老司教は聖騎士の前で王女を奪うことに興奮し、何度も切っ先を秘孔に突き当てる様をアブシルンに見せては、悲しむ王女と悔しむ聖騎士の姿を楽しんでいる。

「さあ、いきますぞリーティ。これでおまえは、僕の妻だっ！」

ズニユツ！ ジュプジュリユジュプ……。

「もう……精液……溜め込ンデ……イヤガッタ……オレも……出ス……っ！」

「ンう……はあはあ……やめなさいそんなモノ、そんな気色の悪いっ!？」

シユル……シユルシユル……ジュリユツ！ ジュプジュプジュプ……。

「ふうあああああああアッ！ 入って……入ってくる……はくッ！」

大きな精液タンクと直結し、射精欲を漲らせたタコ魔の触手が、ゆっくりと孔を押し広げて膣内と腸内に突き刺さってきた。

今までのペニスとは違い。体内でくねり動き、ゴム塊を思わせる弾力で膣壁と腸壁を突き擦ってくる切っ先の感触に、アイネは気持ち悪くもムズ痒い焦燥感に襲われ、背筋を震わせながら瞳を見開いてしまう。

「あふッ……いや……きやうッ！ やめ……くううッ！」

ジュリユツ……ジュプジュリユ……ジュプジュプ……。

秘孔と尻孔を捲り、膣内と腸内でのたうつように動きながらピストンを開始してきた触手に、王女は瞬間的に頭の中を白く染めてしまった。幼児の放尿姿勢で宙に拘束された肢体はくねり、淫らに歪む膣口から大量の愛液が溢れ出していく。

(どうして……どうしてわたしこんなことで……)

嫌悪する陵辱にも拘わらず、感じてしまう肉体に悔しさが込み上げてくる。

胎内に溜まっていた伯爵の精液で反応させられた子宮は、異受胎葉の効果で何倍にも感度を跳ね上げ、否定できないムズ痒さで全身を疼かせ、心まで蝕んできた。

肉体を貫かれる気持ちよさに、桃尻は無意識に左右に動いてしまい。初めて触手に搾り揉まれた肉果実が、切なくも心地いい圧迫感に包まれていく。

「あんんんんッ！　んはッ……お願いやめさせ……やめさせなさいッ……はあはあ……こんな……こんな精液を注がれるのはイヤああああああッ！」

二孔が触手に捲り返され、肢体中を陵辱肉に嬲られ始めたアイネは、幾多の魔物の前で身をくねらせながら、混ざり混ざった魔精液を注がれたくない一心で叫びまくる。しかし、伯爵は幼児の放尿姿勢で陵辱される王女の姿を、笑みを浮かべて楽しむだけだ。

「そんなに、そのタンクの中の精液が嫌ですか？」

「い、イヤよッ……はふッ……こんなモノ絶対に……あんんんんんッ！」

喘ぎながら答える。だが、その間もタコ魔の陵辱は続き、さらに激しくなると肉体を責め立ててきた。

胸は柔らかな乳肉に触手幹を喰い込まされて搾られ、何度も潰し転がされる乳芽が、今にも弾けてしまいそうな痛痒さを肉果実の内部に響かせてくる。

秘孔と尻孔は、何度も入り口を歪まされて擦られる度に、意識が跳びそうな女悦で頭の中を掻き乱し。膣内の触手は、子宮口に切っ先を詰め込んだままうねり擦って、切ない粘膜痺れを肉体中に趨らせてきた。腸内の触手は限界を知らないように蛇腹状の筒内を進み、S状結腸を擦りながら腸全体を侵略してくる。

「はくうううッ！　わたしの全部が魔物に……魔物に犯され……」

ただでさえ異受胎薬と、自分に仔を宿らせるシロロイルの精液で感度を数倍に上げられているのに、感じやすい子宮口を集中的に責めてくる触手の陵辱に、姫騎士は肉体の限界を感じ始めていた。

秘孔と尻孔はヒクヒクしながら触手幹を喰い締め、大量の愛液が決壊したダムのように歪んだ膣口から溢れていく。

胸は搾り揉まれる痛快感に大きく弾み、限界まで尖っている乳芽から、大粒の汗がキラキラと輝いてしぶいている。腰は前後に動いて膣内の壁を触手幹に擦らせ、贅肉一つない腹部が何度も下から上へと波打ち始めてしまった。

「はあうううッ、はうッ……もうダメ……もうッ！」

上下に突き動かされる肢体に悦流が駆け巡り、幼児の放尿体勢だった肢体が痙攣し始めた。触手に搾り揉まれる肉果実は、乳肌を張って大きく揺れ、陵辱肉の先液まみれになって転がされている乳芽が、乳輪ごとプツクリと膨らんでフルフルと震えていく。

尻孔は陵辱幹で拡張されて、触手をどんだん腸に突き込まれ。触手の切っ先を詰め込まれた子宮が激しく収縮し、秘孔が愛液をピシャピシャと吹き出しながら、屈辱の絶頂に達しようとした瞬間。

「その魔物は自分から射精はしない。だが、王女がイッたと同時にその魔物も絶頂し、タシクの中が空になるまで、その身体に精を注ぎ続けますよ」

「ヒヤうッ、んあッ、そッ、そんな……あうッ！ あッあッあッ、ンふああッ！」

突然言われた伯爵の言葉に、姫騎士は長いポニーテールを振り乱しながら理性を振り絞って、絶頂寸前の肉体を抑え込んだ。

しかし、シユロールによって快楽を教えられ、数週間に渡って肉悦を刷り込まれた肉体は、もう貫かれて感じる悦痺れを止めることはできない。

子宮口を常に責められながら秘孔を捲り返され、グプグプと尻孔に入り腸内を侵攻してくる陵辱肉に、肉体全てが喜び汗まみれの肌に悦痺れを趨らせてくる。

意識を離れた細腰は、止めようとするアイネの意志を無視して激しい迎え腰を使い、触手に射精させようと、膣壁と腸壁をびつたりと陵辱肉に張り付かせて扱いてしまう。

「早く……イケ……オレ……早く出シタイ……おまえの中……破裂させる……」

「イヤ……ひゃひ……そんなら……ふあくッ！　こんら精液……出しやれ……ふあら……ンッ！　壊りえ……わひゃひ……あうッ！　あうッ！　あッ、あッ、あッ、ンああッ！」  
肢体を痺れさせ、頭の中まで感電させてきた肉交の快楽に、姫騎士はどうとう呂律まで回らなくなり始めた。

絶頂したくてもできない苦悦に、上下に揺さ振られる肢体は小刻みに震えて発情の汗を飛び散らし、子宮口が触手の切っ先に吸い付いて離れなくなっている。

腸内を進んできた触手はどうとう彼女の胃にまで侵入し、胃壁に切っ先を突き当てて、背徳的な狂悦でアイネにとどめを刺してきた。

「ふああああああッ！　もふう……もふゆらめ……わらひイク……あうッ！　はうッ！





## 第七章 女神と聖女の屈辱

「ひゃん……そんなに焦らないで……わたくしは皆様の娼婦ですわ……」

皆に淫らな姿を見せないように必死で暴れ、胸や淫部をさわる魔物の手を引き剥がすアイネに対し、リーティは自ら彼らに肉体を捧げ始めた。

「リーティ……そんな……」

妹の堕ちた姿に愕然としてしまう。

魔物たちの手は、そんな対照的な姿の双子姫の肉果実を揉み、秘孔を廻ろうと淫部にまで滑り込んできた。

アイネの唇からは、自然と艶めかしい吐息が洩れて謁見の間に木霊し、肉欲に抗えない肉体が少しずつ力を失っていく。

「早くぶち込んで差し上げろ。そうすれば自分から求めるはずじゃ」

「あんっ！ いいですわ……早くこのいやらしいオマンコに……」

隣にいるリーティが、二体の魔人を並ぶように仰向けで寝かせ、勃起したペニスを天井に向けてさせていく。

「やだリーティ……わたしは……」

臣下や国王、そしてフィアンセの前で犯される恥辱に、姫騎士の背筋に寒気が趨っていく。しかし、それと同時に、肉体が切ない焦燥感に包まれ始めた。

熱くて硬いペニスに膣を貫かれ、女を強制絶頂に導く魔精液を膣内に注がれる。その犯される快楽に反応した秘孔が勝手に疼き、伯爵の精液を溢れさせていく。



「ンんんッ！ わたくしもですわ……チンポ最高……」

ジュプッ、ジュプッ、ジュプッ、ジュプッ！

腰が自然と動き、堕ちた魔道姫とともに、魔人に跨った肢体を上下させてしまった。

快楽に負けた肢体は、みんなに見せるように峰乳を大きく弾ませ、上擦る声が魔物たちの興奮まで高めていく。

「ケケケ、本当に自分から動き始めやがったっ！」

「オレは尻だ、尻をもらうぜっ！」

「胸だあ、このいやらしいおっぱいはオレのもんだあ」

自分から肉交を始めた王女たちの姿に、興奮した魔物たちが一斉に襲いかかってきた。

性欲を漲らせた彼らは、思い思いの場所に魔肉槍を押し付け、高貴な肢体を貫こうと亀頭から先液まで吹き出している。

「ンあッ！ はうッ……はあはあ……リーティがこんなになつてるなんて……もういい……あうッ！ いいわ……きてッ！ みんなでわたしを犯してえええッ！」

「早く、早く入れて……ひゃふッ……んッ……はあ……はあ……お尻もおっぱいも……全部みんまで……はむッ！ んッ、んッ、んッ……ンチュばあ……」

妹姫の姿に落胆した姫騎士は、もう自暴自棄になってしまった。

次々と押し付けられてくる魔肉槍を、アイネは隣で喘いでいるリーティとともに躊躇なく尻孔に受け入れ、揺れる肉果実の谷間にまで挟んで抜き始めた。

口は自然と口淫を求めたペニスにしゃぶり付いて舌を絡ませ、亀頭を喉奥にまで迎えて喉粘膜を絡み付かせていく。

「ンううッ！ んチュパッ……はむッ……んッ、んッ、んッ、んッ！ ふうあ……熱いわ……わたしの身体に熱いのがいっぱい擦れて……チュパッ！ もつと……もつとわたしに擦り付けて、白くて臭い精液を注ぎ込んでッ！」

「あんッ、美味しいですわ……はむッ……んチュふあ……チュルル……ンあッ、ンむううッ！ 犯して……もつと……もつと美味しチンポでわたくしを犯してッ！」

肢体を激しく上下させ、ポニーテールとロングヘアの金髪を振り乱して乱れる双子王女の姿に、魔物たちの腰つきが速くなっていく。

肉体に擦りつく火傷するような魔肉槍の灼熱感に誘われ、アイネは淫らな言葉で快楽を告げてペニスを頬張り、娼婦顔負けの口技で魔物を射精へと導き始めた。

両手にはそれぞれ一本ずつ灼熱の肉槍を握って抜き、いつ射精してもいいように、醜い切っ先を自分の肢体へと向けてしまう。

「はむッ、んんんッ！ いいわ……お腹の中の二本が擦れて……あうッ！ 出して……早くわたしの中に……早く精液を注ぎなさいッ！ あふッ……んチュッ……んンッ……」

「ひゃあああああッ！ イク……わたくしもうイッちゃいますわッ！ 見られてるのが気持ちよくて……チュふあ……はむッ、んンンンッ……」

国王に、臣下に、想い人に、そしてお腹の仔の父親に見られながら、幾多のペニスに奉

仕する興奮に、姫騎士は早くも絶頂に昇り始めた。

騎乗位のまま肢体を上下させる度に、膣内と腸内は掻き毟りたいほどの粘膜痒さが発生し、背筋が直接くすぐられているような悦痺れでマヒさせられていく。

「王女様……」

「こんなことが……」

魔物の娼婦になった王女の姿に、臣下の悲しむ声が聞こえる。だが、そんなことはどうでもいい。ペニスもたらしてくれる快楽。それが今の姫騎士の全てになってしまった。

「ヒキキキキ！ さすが魔王の母体だ。こんな女は初めてだぜ！」

「ぐえっ！ すげえ、すげえっ！ チンポがマンコに溶かされちまいそうだあ」

肢体を貫き、肌を擦り付けられてくる全ての魔肉槍の熱が高まり、肉幹を太くしながらビクビクと脈動させ始めた。切っ先からは半透明な先液が迸り、アイネの肌を穢してくる。

「んあッ、んんンッ！ もう……もうイクのッ!! いいわきてッ……熱い精液いっぱいけてッ！」

射精寸前のペニスに、姫騎士の美貌に笑みが浮かぶ。

精液を欲した肢体は、少しでも早く彼らを射精させようと、掌で握った魔肉槍や胸の谷間で震える肉幹を、肢体を揺さ振って激しく刺激し、膣と腸はネットリと襞と壁を陵辱槍に絡ませて大きくうねっていく。

唇は肉幹をきつく締め付けて吸引し、口腔で舌先を亀頭の先割れに這わせながら、汚ら



しい鈴口を責めまくってしまった。

「クベベベッ！ もう限界だつ、出る、出るうううううッ！」

「オレもだ！ 孕めつ、俺の仔も孕んじまえッ！」

「飲め、全部飲めこの雌犬つ、淫乱王女めがつ！」

「んあああッ！ はうッ、あッ、あッ、あッ、あッ、あッ！ イク……わたしもみんなと一緒に……はむッ！ チュバッ！ んッ、んッ！ イッチャ……はくッ!!」

「きやふッ、はうッ、はあはあはあ……んうううッ！ 早く……早く……早く……早く……気持ちいい精液……あんッ！ わたくしをイカせてえええええッ!!」

びゅびゅるるッ！ どびゅるッ、びゅくびゅるびゅりゅびゅびゅるびゅるびゅるッ！  
「んくうううううううううううう—— ツッッ！」

姫騎士の息詰まった声と、魔道姫の求める嬌声が謁見の間に響き渡った瞬間。王女の痴態とその美肢体が与える快楽に我慢できなくなった魔物たちが、一斉に魔肉槍を引き攣らせて、膨らました切っ先から陵辱液を迸らせてきた。

女を強制的に絶頂させる熱く滾る粘液を注がれた膣と腸からは、肉体を感電させるような悦流が発生して脊髄をマヒさせ、全身から駆け上ってきた悦流が絡まりながら頭の中を貫いてくる。

「くはッ！ はうッ！ ンうううううううううう—— ツ！」

「ひゃひッ！ いいですわッ！ もつとおおおおお—— ツ！」



を啜えた秘孔と尻孔からは、体内に吐き出された陵辱液が泡立ちながら溢れ始めた。

「んく……んふぁ……はぁはぁはぁ……美味しかったですわ……」

リーティが射精を終えたペニスを吐き出し、唇の端から白い涎を零しながら淫らかな笑みを浮かべている。

（幸せそうな貌、わたしも同じ貌で……）

双子の妹の淫らかな貌に、今の自分の姿が重なる。そして何より、飲んでしまった精液の感想が同じだ。

「うふ……素敵でしたわ……」

（そんな貌しないでリーティ……そんな幸せそうな貌……）

残った精液をピュクピュクと吹き出すペニスを目前にした魔道姫が、うつとりとした表情で笑みを浮かべ、口腔に残った陵辱液の後味を楽しんでる。

だが、そんな妹姫よりも、アイネの方がよっぽど淫らになっている。もう口腔のペニスは精を迸らせていないというのに、貌をまだ前後に動かして魔肉槍を舐めしゃぶり、もう一度精を放たせようと、頬をすぼめて吸引までしてしまったのだ。

「ヒヒ、よかったぜ雌王女さま」

「また楽しもうぜ、ケケ」

射精し終わった魔物たちが、一斉にペニスを肌から離していく。

「あぁ……」

胸の谷間や握っていた魔肉槍、そして肢体を動かされて全ての孔から引き抜かれた喪失感に、姫騎士は妹姫と同時に、思わず切ない声を洩らしてしまった。

快楽を与えてくれるモノを失った肢体は、自らを慰めるように穢れた峰乳を自分で揉み、精液を溢れさせる秘孔に細指を這わせてしまう。

「お姉さま……魔物の精液にまみれて、とつても綺麗ですわ……」

「そ、そんなこと言わないで……んん……」

リーティに賛美された白濁まみれの肢体が、魔物だけではなく、臣下や国王、想い人にも見られているのを感じる。しかし、一對多の肉交で絶頂した身体が、少しも鎮まろうとしない。それどころか、精を注がれる前よりも疼いているような状態だ。

「もっと犯して欲しいのか？」

「は、はい……ください……もっと犯して……もっとわたしたちをチンポで貫いてっ！」  
シロロイルの言葉に、肉悦に降った姫騎士は恥じらいもなく叫んでしまった。

「ならば立っていただきますかな」

ルマウィルが伯爵の言葉を続けるように命じてくる。

ともに魔王の子孫で、彼女たちに最高の快楽を与えてくれる相手。その彼らの命令に、アイネとリーティは素直に従い、脚をプルプルと震わせながら立ち上がった。

「ひゃひゃひゃひゃひゃ！ さすが儂らの妻じゃ。その淫らで魔に染まった肢体を、もっと皆に見せてやったらどうですかっ！」

この続きは製品版をご購入の上、  
お楽しみください。

編集・発行

**株式会社キルタイムコミュニケーション**

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

**<http://ktcom.jp/>**

# あとみっく文庫最新刊

ちょっと大人のライトノベル / 毎月下旬ぞくぞく刊行中!! 定価 / 本体690円(税込)

全国書店で  
**好評発売中**



**少年に封じられた  
魔神降臨の刻!**

玲音と冬馬、交差する2人の物語、  
衝撃の最終章へ!

全国書店で  
**好評発売中**



**お腹の子供のババを探してます!!**  
ポテ腹魔法少女が父親探しにひたすらH!

**ピルグリムメイデンⅢ** 復讐の魔神  
【小説：狩野景 / 挿絵：ぼち。】

**魔法妊婦ハラマセ∞ハラズメント**  
【小説：上田ながの / 挿絵：瀬上大輔】

**魔海少女  
ルルイエ・ルル2**  
【小説：羽沢向 / 挿絵：ピエール☆よしお】



全国書店で  
**好評発売中**

**クトゥルフの娘たちが  
学園祭でメイドさんに変身!?**  
ルルたちに新たな邪神が這い寄り!

**既刊LINEUP**

- 山嵐学園戦姫 / ノブナガ! ①~③
- BLANGEL 輪に乃て語る愚者の夜
- 不死の吸血鬼ガトラスのご主人様を募集しようです

全国書店で好評発売中

- 思春期なアダム ①~③
- 呪詛漁らい師【コースイーター】
- 女幹部メル様のセカイ征服計画
- 借金お嬢 크리스 ①~③
- 無敵の短剣士ガトラスに目覚めたようです
- 宇宙海賊学園 ブラックキャット



# キルタイムコミュニケーション オフィシャルサイト

<http://ktcom.jp/>

- 雑誌、コミック、小説の**通信販売**もやってるよ!
- 二次元ドリームマガジン・コミックアンリアルの**バックナンバー**も買えるよ!
- ジャンル別**で作品も選べて超便利!
- 二次元編集部**の愉快的Blog**も更新中!

**ヴァルキリエ**  
http://www.comic- Valkyrie.com/

**cranberry**  
http://www.cran-berry.com/

**mille-feuille**  
http://www.mille-feuille.jp/

**モバイル二次元  
ドリーム**  
http://www.2d-dream.jp/



KTCの戦うヒロインオンリー漫画雑誌! 18禁ではないからこそ表現できるドキドキがある!!

二次元ドリームノベルズがアニメにも進出! 新生ブランド・cranberryをよろしく!!

二次元ドリームノベルズから生まれた美少女ゲーム! 「ミルフィーユ」ブランドにて続々登場!

二次元ドリームノベルズが携帯電話で読める! 携帯サイト限定の書き下ろし小説もあるよ!